

タイ語の代名詞代用表現・呼びかけ表現：
使用実態と日本でのタイ語教育に関して

**Pronoun Substitutes and Address Terms in Thai Language:
Actual Usage and Education in Japan**

ウィッタヤーパンヤノン (齋藤) スニサー

東京外国語大学 世界言語社会教育センター

WITTAYAPANYANON (SAITO) Sunisa

World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 言語データとアノテーション実施方法
 - 1.1. タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現
 - 1.2. 言語データ
 - 1.3. アノテーション実施方法
2. 言語データでのアノテーション結果
 - 2.1. 出現回数
 - 2.2. 使用語彙
3. タイ語教育での代名詞代用表現・呼びかけ表現
 - 3.1. 教材の中での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する説明
 - 3.2. 代名詞代用表現・呼びかけ表現の教材での使用状況
4. タイ語教育における課題
 - 4.1. 課題
 - 4.2. 今後に向けて

おわりに

キーワード：代名詞代用表現、呼びかけ表現、外国としてのタイ語教育、タイ語教材

Keywords : Pronoun Substitute, Address Term, Thai language education as a foreign language,
Thai Language Textbooks



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿はタイ語の話しことばにおける代名詞代用表現と呼びかけ表現の使用実態を観察するとともに、日本における外国語としてのタイ語教育における、これらの表現の指導方法に関する考察である。使用実態を調査するため、TVドラマの台本と小説から成る言語データを新たに構築し、その中で話し手、聞き手、呼びかけ表現である23,701語にアノテーションを実施した。加えて、4冊のタイ語教材を対象に、これらの表現の説明内容を確認するとともに、教材の中のタイ語文に言語データと同様の方法でアノテーションを実施し、言語データとの比較検証を行った。その結果、教材の中で一部の代名詞代用表現の説明はあるが、対話文や例文等での代名詞代用表現の使用頻度は低く、使用されている語にも偏りが見られた。タイ語の対話では、話者間の関係性や状況に応じて、適切な人称表現を選択することが求められるため、学習の初段階から学習者は代名詞代用表現も含めた人称表現の多様性を認知し、多様な選択肢の中から適切な語を選択する習慣を身に付けることが必要と考える。

Abstract

This paper aims to examine the actual usage of pronoun substitutes and address terms in Thai conversation, and investigate how these terms are taught in Thai language education as a foreign language in Japan. To survey the actual usage of the terms, we annotated 23,701 words that indicate speaker, addressee, and address term in language data, which were newly created from TV drama scripts and novels. In addition, we confirmed the explanation of the terms and annotated the terms in four Thai language textbooks in the same way as we did for the language data to compare with the result of the language data annotation. As a result of the comparison, the usage ratio of pronoun substitutes in dialogues and example sentences of the textbooks is low, and the used words are limited even though several pronoun substitutes are explained in the textbooks. Since it is necessary to choose appropriate personal expressions according to relationships among speakers and situations in Thai conversation, Thai language learners need to recognize the diversity of personal expressions, including pronoun substitutes, from the beginning of their learning and acquire the habit of choosing appropriate words from diverse options.

はじめに

多くの東アジア・東南アジアの言語では、人称代名詞ではないものの、話し手・聞き手を示す代名詞代用表現 (pronoun substitute) 及びそれと関連の深い呼びかけ表現 (address term) が広く一般的に用いられており、これらの表現に関する通言語的協同研究 (以降「協同研究」)¹⁾ を筆者も含めた8言語²⁾の専門家と自然言語処理の専門家で行っている。協同研究は、個別言語・通言語レ

1) 科学研究費補助金基盤研究 (B)2020-2024 年 JP20H01255 「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語学的研究」 (研究代表者: ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤) スニサー)

2) 日本語、朝鮮語、マレー語、インドネシア語、ジャワ語、タイ語、ベトナム語、ビルマ語

ベルでの調査・分析を行い、言語学的研究の他、工学的応用研究・開発や言語教育など多方面の領域に資する言語資源の構築を目指すものである。その中で、具体的にどのような表現が代名詞代用表現・呼びかけ表現となり得るのかを明らかにするため、各言語で選定した言語データの代名詞代用表現・呼びかけ表現へのアノテーションを行った。本稿の1、2章ではタイ語の話しことばの言語データに行ったアノテーション結果の概要・特徴を明らかにし、3、4章では1、2章での検証結果と日本でのタイ語学習教材の内容を比較し、今後のタイ語教育への活用方法を試みている。なお、本稿中のタイ語の音韻表記についてはウィッターヤーン (2015) に従う。

1. 言語データとアノテーション実施方法

1.1. タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現

ウィッターヤーン (2020) では、人称代名詞以外の表現で発話者・対話者を示す「代名詞代用表現」に相当するタイ語の語彙として *kham theen burüt sàpphanaam* という用語を提唱し、それが生起する位置は主語、目的語の位置と述べているとともに、対話者を発話の伝達先として同定する「呼びかけ表現」に相当するタイ語語彙として *kham riak bùkkhon* という用語を提唱している。対話者への注意喚起機能と再喚起機能を有する *kham riak bùkkhon* 「呼びかけ表現」は、文法的には主語や目的語の役割はなく、本文からは独立しているとともに、*kham riak bùkkhon* 「呼びかけ表現」には終結小辞が必要な場合もあると述べている。加えて、親族名称や職業名称、役職名称、人名などの名詞の前に付加され使用される語を *kham namnâa naam* 「タイトル」と呼ぶことも合わせて提唱され、タイ語での *kham namnâa naam* 「タイトル」は、敬意を表す表現以外にも、年下の対話者に対して、人名の前に *nóŋ* 「弟・妹」を付加して親しさを表す機能を持つ表現などもあるとしている。

1.2. 言語データ

本研究で活用した言語データは表1で示している TV ドラマの台本及び小説となり、それらの対話部分を対象にアノテーションを実施した。これらのデータの対話は、一部1世紀程前の表現や貴族が使用する表現が含まれているものの、大部分は現代口語での自然なタイ語対話であるとタイ語母語話者である筆者が判断し、タイ語の話しことばの使用実態を確認するのに適したデータであると考え、これらのデータを活用することとした。発話数は全言語データで20,606、単語数では272,342語である。

表1: アノテーションを行ったタイ語の言語データ

	タイトル	種別	特徴	発話数	単語数
1	<i>nakhii</i> (1 話)	ドラマ 台本	現代口語 / ファンタジー	255	3,016
2	<i>phíphóphímmáphaan</i> (1 話)		現代口語 / ファンタジー	207	2,289
3	<i>phlœŋnaakhaa</i> (1 話)		現代口語 / ファンタジー	174	1,673
4	<i>Dare to Love</i> (24 話)		現代口語	9,940	127,220
5	<i>khwaamsùk khǒŋ kathi?</i>	小説	現代口語	92	1,459
6	<i>tèpaŋkòŋ</i>		1910 年から現代までの口語 (含貴族表現)	2,356	38,888
7	<i>námsâycayciŋ</i>		現代口語	3,676	41,609
8	<i>phâathœŋ</i>		現代口語	3,906	26,188
		計		20,606	272,342

1. 3. アノテーション実施方法

アノテーションの対象とした語は、人称代名詞も含めて、言語データ中の話し手と聞き手を示す語全てとなり、協同研究共通でメイン (Main) とサブ (Sub) の2階層のタグを設定している。タイ語の言語データで使用したタグは表2の通りである。

表2: アノテーションでのタグの種類

メイン (Main)	
話し手 (Speaker)	文の主語または目的語
聞き手 (Addressee)	
呼びかけ表現 (Address Term)	文の中で文法的な機能がなく、文頭、文中、文末に生起
サブ (Sub)	
KT(Kinship Term)01	基本義、家族構造・血縁関係あり、参照点=話し手
KT(Kinship Term)02	派生義、家族構造なし 例) 先輩や店員など赤の他人を「お兄ちゃん」と呼ぶ
KT(Kinship Term)03	基本義、家族構造・血縁関係あり、参照点=話し手の家族・親族の一人 例) 母親が自分の息子を「お兄ちゃん」と呼ぶ (参照点=末っ子の子供)、 母親が自分のことを「お母さん」と呼ぶ (参照点=子供)、 父親が妻のことを「お母さん」と呼ぶ (参照点=子供)
KT(Kinship Term)04	基本義、家族構造あり、参照点=話し手の家族・親族以外の一人 例) 友人の子供のうち年長者の方を「お兄ちゃん」と呼ぶ
KT(Kinship Term)05	タイ語特有のタグ、対象である人が元来の意味から大きく異なるケース (派生義) 例) アイドルを年齢と関係なく「兄・姉、弟・妹」という語を名前の前に付ける phii 「兄・姉」/nóoj 「弟・妹」+個人名、 同年齢の友人を「弟」と呼ぶ、自身の母を「姉」と呼ぶ
タイトル (Title)	タイ語の kham namnâa naam に該当 敬意や親疎を表す機能を有し、人名などの前に置かれる 例) ?ây 「奴」/yay 「～ちゃん」/bóot 「ボス」+個人名 二重で付ける場合もある 例) phii 「兄・姉」+ thanaay 「弁護士」+個人名の場合、タイトルは KT + 職業 名称
終結小辞 (Particle)	タイ語特有のタグ、呼びかけ表現の一部
人称代名詞 (Pronoun)	代名詞代用表現とみなされない話し手、聞き手を示す表現 原則、 <i>The Royal Institute Dictionary</i> に準拠 (一部例外有 ³⁾)

メインタグは3種類あり、その語が話し手 (Speaker)、聞き手 (Addressee)、呼びかけ表現 (Address Term) のいずれであるかを特定するもので、アノテーションの対象である全ての語にメインタグは付されている。なお、本稿では便宜上、話し手、聞き手、呼びかけ表現の分類グループを「用法」と呼ぶこととする。メインタグが付された語の中で、親族名称 (Kinship Term、以降 KT) やタイトル (Title)、終結小辞 (Particle) といった定義に該当する語には、統語論・語用論的情報をサブタグとして付加している。代名詞代用表現と識別するため、サブタグの中には人称代名詞 (Pronoun) も設定している。メインタグとサブタグの設定は協同研究で扱う8言語で原則共通だが、タイ語ではタイ語特有の特性に応じて追加で2つのサブタグを設定した。タイ語特有のサブタグの1つはKT05である。KT01～04については、参照点や実際の親族関係の有無の違いはあるものの、親

3) tua?eej 「自身」は、*The Royal Institute Dictionary* では代名詞とされているが、「自身」を意味する語は協同研究では代名詞代用表現とされているため (岡野 et al. 2022)、アノテーションでは代名詞代用表現としてタグ付けを行っている。

族名称の基本義に準じた使用法である。一方で、KT05 については、親族名称の基本義とは全く関係のない関係性において使われるものである。もう 1 つのタイ語特有の追加サブタグは終結小辞である。終結小辞は呼びかけ表現の一部とされているため (ウィッターヤーパンヤーノン 2020)、サブタグの 1 つに加えている。タグとは別に聞き手が特定される形で話し手が一般名詞を使用した場合、例えば、明らかに社長でない人を *thân prathaan* 「社長様」と呼んでいる場合は、コメント欄に *alias* (愛称) と注記を加えている。

上記の定義に基づき、タイ語母語話者が 2 名体制で分担してアノテーションを実施した後、それぞれが行ったアノテーション内容の相互確認も行った。

2. 言語データでのアノテーション結果

2.1. 出現回数

タイ語の全言語データの中で、メインタグが付された語の出現回数をまとめたものが表 3 で、話し手、聞き手、呼びかけ表現の出現回数は計 23,701 回であった。その中で、代名詞代用表現の出現回数は、話し手 = 3,090 回、聞き手 = 3,137 回、呼びかけ表現 = 3,689 回となり、代名詞代用表現のみに着目すると呼びかけ表現の出現が最も多かった。一方で、人称代名詞も含めるとその順番は逆転し、話し手 = 11,829 回、聞き手 = 7,968 回、呼びかけ表現 = 3,904 回となり、話し手の出現回数が最も多くなる。話し手や聞き手の場合、代名詞代用表現の使用率がそれぞれ 26%、39% となっているのに対して、呼びかけ表現については、代名詞代用表現の使用率が 94% と圧倒的に代名詞代用表現の方が高い割合で使用されている。

表 3: 全言語データ内でのメインタグ数

	話し手	聞き手	呼びかけ表現
代名詞代用表現	3,090(26%)	3,137(39%)	3,689(94%)
人称代名詞	8,739(74%)	4,831(61%)	215(6%)
計 23,701	11,829(100%)	7,968(100%)	3,904(100%)
全出現回数内での比率	50%	34%	16%

【備考 1】表中 () 内は各用法内での比率 【備考 2】比率は各グループの出現数を四捨五入したままの数字を表示

次にサブタグの情報などをもとに、代名詞代用表現と呼びかけ表現を表 4 で示したように 8 グループへの分類を行った。(1)KT01 から (5)KT05、及び (7) タイトル + 個人名の中のタイトル部分についてはサブタグが付された語となる。タイ語でのタイトルは個人名や親族名称 (KT)、職業名称などのボディである語の前に付加され、敬意や親疎を表す機能を有している。また、親族名称 (KT) や職業名称などがタイトルとなることもある。他にも *phii* 「兄・姉 = 親族名称」 + *thanaay* 「弁護士 = 職業名称」 + 個人名といったケースのように、二重のタイトルもある。なお、タイトルとして親族名称 (KT) が使われている語やボディである親族名称 (KT) の前にタイトルが付加されている語については、(1)KT01 から (5)KT05 の中のいずれかに分類している。(6) 個人名と (7) タイトル + 個人名の中の個人名については、タグ付けはされていないため、タイ語母語話者である筆者によって判定・仕分けを行った。(8) その他については、(1) ~ (7) に該当しないものとなり、職業名称や立場・職位を表す語などが見られた。

表 4: 代名詞代用表現・呼びかけ表現のグループ別出現回数

グループ	話し手	聞き手	呼びかけ表現
(1) KT01	---	728(23%)	544(15%)
(2) KT02	413(14%)	977(31%)	694(19%)
(3) KT03	1,039(34%)	4(0.1%)	1(0.03%)
(4) KT04	59(2%)	23(1%)	29(1%)
(5) KT05	11(0.4%)	8(0.3%)	105(3%)
(6) 個人名	1,327(43%)	561(18%)	1,262(34%)
(7) タイトル+個人名	11(0.4%)	381(12%)	616(17%)
(8) その他	230(8%)	455(15%)	440(12%)
計	3,090(100%)	3,137(100%)	3,629(100%)

【備考 1】表中()内は各用法内での比率 【備考 2】比率は各グループの出現数を四捨五入したままの数字を表示

これらの 8 グループへの分類を通して確認できた特徴の 1 つとして、実際の家族ではない人に親族名称を使用する (2)KT02、及び (6) 個人名については、いずれの用法においても高い頻度で使用されてる点が挙げられる。呼びかけ表現は対話者を発話の伝達先として同定する機能があることから、(6) 個人名が多く使われると考えられるが、話し手についても代名詞代用表現の中では 43% と最も高い割合で (6) 個人名が使用されていることが確認された。日本語では幼い子が自称で自分の名前を使うことはよく見られるが、一定の年齢以上になると、自身を自分の名前で呼ぶケースは少ない。一方、タイ語では主に女性を中心に年齢に関わらず自分の名前を自称として使用している。

2 つ目の特徴としては、(3)KT03 が話し手として使われることが最も多い点である。(3)KT03 は家族の誰かが参照点になっており、例えば、母親が自分のことを「お母さん」と呼んだりするケースである。(3)KT03 は後段で示す具体的な単語を観察すると、親子間の対話でよく使われていることが分かる。

特徴の 3 点目は、(7) タイトル+個人名や (8) その他の代名詞代用表現については、聞き手や呼びかけ表現として多く使われていることである。一方で、これらは話し手としての使用は少ないものと予測していたが、khun 「～さん」といったタイトルや thanaay 「弁護士」、?ayyakaan 「検事」といった職業名称も話し手として一部使用されていることが観察された。

2. 2. 使用語彙

表 5 は代名詞代用表現・呼びかけ表現の 8 グループ別、及び人称代名詞の使用語彙数を示したものである。(6) 個人名については、個人名の種類の数を集計しても本研究では意味をほとんど持たないと思われるため、個人名については本集計の対象外としている。(7) タイトル+個人名の場合も同様で、タイトルとして使用されている語の種類だけを集計対象としている。

全体での大きな特徴としては、(8) その他において、各用法とも使用される単語の種類が非常に多く、特に聞き手と呼びかけ表現では、100 種類以上の語彙が使用されている⁴⁾。それに対して、(1) KT01 ～ (5)KT05 と (7) タイトル+個人名においては、使用されている語彙は呼びかけ表現の (7) を

4) ボディとしての語は同一でもタイトルと終結小辞の違いは別の語として集計。

除き、最大で 16 種類であり、使用される語の種類はある程度は絞られている。

親族名称 (KT) の中でも外国人のタイ語学習者が実際に使用する可能性が高いのは、血縁関係者以外への使用である (2)KT02 となり、本稿のテーマの 1 つである外国語としてのタイ語教育への活用という点で、ここで使用される語彙に着目する必要があるかと思われる。また、人称代名詞についても、各用法で 18 ～ 28 種類と非常に多様な語彙が使用されており、タイ語教育という点では人称代名詞も併せて考えるべき要素である。

表 5：代名詞代用表現・呼びかけ表現、人称代名詞の出現語彙数

	話し手	聞き手	呼びかけ表現
代名詞代用表現・呼びかけ表現			
(1) KT01	---	16(728)	14(544)
(2) KT02	11(413)	13(977)	14(694)
(3) KT03	16(1,039)	2(4)	1(1)
(4) KT04	6(59)	4(23)	4(29)
(5) KT05	3(11)	3(8)	8(103)
(6) 個人名	---	---	---
(7) タイトル+個人名	6(11)	11(381)	25(616)
(8) その他	51(230)	100(455)	147(440)
人称代名詞	28(8,739)	28(4,831)	18(191)

【備考】表中()内は出現回数

次に各グループで使用された具体的な単語を示したものが表 6 である。特に (2)KT02 では「兄・姉」を意味する *phii* という語が幅広く使われていることが確認できる。*phii* をタイトルとして個人名と組み合わせる用法については、聞き手と呼びかけ表現で多く見られるが、呼びかけ表現の方が多用されている。これは発話の伝達先を特定するために、個人名も合わせて用いる必要があるためと考えられる。

また、タイ語の特徴として、親族名称 (KT) を代名詞代用表現・呼びかけ表現で使用する場合は、参照点が最年少の家族に限らないという点がある。例えば、日本語では母親と子供の対話で、子供が母親を「お母さん」と呼び (KT01)、母親が子供を参照点とする自称として「お母さん」を使用する (KT03) ほか、母親と子供 2 人の対話の場合、年下の子どもを参照点として母親が年上の子供を聞き手や呼びかけ表現として「お兄ちゃん」と呼ぶケース (KT03) のように最年少の家族を参照点とするケースが多い。一方で、タイ語の言語データでは母親や父親を参照点として、「子供」を意味する *lûuk* が多く使用されることが確認された。母親・父親が聞き手もしくは呼びかけ表現として *lûuk* を多く使用し (KT01)、子供も話し手として母親・父親を参照点とする *lûuk* を使用している (KT03)。今回の言語データでは上位には現れなかったが、他にもタイ語では参照点が年上である「弟・妹」を意味する *nóŋ* も同様に聞き手や呼びかけ表現では KT01 として、話し手では KT03 として頻繁に使用されている。

表 6: 言語データでの代名詞代用表現・呼びかけ表現、人称代名詞の出現語上位

	話し手	聞き手	呼びかけ表現
代名詞代用表現・呼びかけ表現			
(1) KT01	---	lûuk(333), m̂ε(93), phô(73)	phô(101), lûuk(96), m̂ε(77)
(2) KT02	phii(333), c̄εc(30), p̄aa (19)	phii(697), phii+PN(159), p̄aa (26)	phii+PN(376), phii(125), p̄aa (34)
(3) KT03	m̂ε(521), phô(182), lûuk(123)	m̂ε(2), phô(2)	phô(1)
(4) KT04	phii(27), m̂ε(16), p̄aa (7)	khun m̂ε(14), phô(7), phii(2)	phô(18), yaay(4)
(5) KT05	phii(5), m̂ε(3), lûuk(3)	m̂ε(7), m̂ε+PN(5)	m̂ε+PN(58), yaay+PN(9), phô+PN(8)
(6) 個人名	---	---	---
(7) タイトル+個人名	thanaay(3), ?ây (2)	khun(47), thanaay(3), ?ây(2)	khun(83), ?ây (24), ?ii(12)
(8) その他	ȳiŋ(67), chaay(34), khruu(24), tua?εεŋ(10), thanaay(9), m̄ô(9)	b̄ô(77) ?aacaan(39) phayaan(36)	?aacaan(38) b̄ô(34) khun chaay(25) khun ph̄uuȳiŋ(24)
人称代名詞	ph̄ôm(3,155), chán(3,128), raw(970)	khun(1,640) thə(1,325) raw(600)	khun(58) thə(46) k̄ε(22)

【備考 1】表中 () 内は出現回数 【備考 2】PN=Personal Name (個人名)

最後にタイトル及び終結小辞としてアノテートされた語の中で、出現回数が多い語を表 7 に示している。語彙数が多いため、呼びかけ表現については、出現回数 10 回以上の語を掲載しているが、それだけでもタイトルの多様性を見ることができる。

表 7: 言語データでのタイトル、終結小辞の出現語上位

タイトル			終結小辞 (3 回以上出現)
話し手 (3 回以上出現)	聞き手 (3 回以上出現)	呼びかけ表現 (10 回以上出現)	
?ây(8) nóŋ(5) thanaay(4) phii(3)	khun(436), phii(159), b̄ô(113), thanaay(14), th̄aan(14), nóŋ(13), p̄aa(10), lûuk(7), phô(6), m̂ε(5), ?ây(5), chaay(4), ȳiŋ(4), n̄u(4), c̄εc(3), c̄aw(3), c̄awnaaŋ(3), m̄ô(3)	khun(438), phii(401), ?ây(126), b̄ô(82), thanaay(14), m̂ε(70), nóŋ(44), ?ii(39), c̄εc(26), tha- naay(22), th̄aan(21), chaay(20), naŋ(15), phô(15), yay(15), naay(15), lûuk(13), m̄ôm(13), ȳiŋ (11)	khá?(44), khráp(29), kh̄aa(19), ?əy(11), ?əy(7), ná?(7), l̄a?(6), c̄aa(4), n̄a?(4), w̄ooy(3), cá?(3)

【備考】表中 () 内は出現回数

3. タイ語教育での代名詞代用表現・呼びかけ表現

冒頭で述べた通り、協同研究の目的は多方面の研究領域に資する言語資源の構築を目指すものであり、その研究領域の 1 つとして言語教育がある。本章と次章では今回得られたアノテーションの情報をを用いて、外国語としてのタイ語教育への活用方法の検討を試みている。

3. 1. 教材の中での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する説明

現在の日本でのタイ語教育の中で、代名詞代用表現と呼びかけ表現がどのように教えられているかを確認するため、4冊の教材分析を行った。分析対象としたのは(a)『表現を身に付ける初級タイ語』⁵⁾(ウィッタヤーパンヤーノン 2016)、(b)『表現を広げる中級へのタイ語』⁶⁾(ウィッタヤーパンヤーノン 2017a)、(c)『タイ語(世界の言語シリーズ)』(宮本、村上 2014)、(d)『タイ語の基礎』(三上 2002)の4冊で、これらは日本にある大学のタイ語専攻科で主に1年生から2年生の授業で使用される教材である。(a)、(b)、(c)は会話や表現を中心とした内容で、(d)は文法中心の内容となり、(a)と(b)は2冊シリーズとなっている。

タイ語教育における人称表現の調査・分析を総合的に行うためには、初級レベルの教材だけでなく、中級、上級レベルも含めての検証が必要となるが、タイ語教育では初級レベルが重要な意味を持つと考える。ウィッタヤーパンヤーノン(2017c)、及びウィッタヤーパンヤーノン&富盛(2020)では、CEFR(ヨーロッパ言語共有参照枠)のタイ語教育への適用の可能性に関する検証を行っているが、CEFRをタイ語教育に適用するには、タイ語特有の社会的・文化的背景を織り込む必要性について言及している。タイ語特有の社会的・文化的要素として(1)相手との位置関係の確認、(2)距離の操作、(3)人間関係を保つための配慮、(4)相手に負担をかける場合の働きかけ、(5)文体の操作、の5点が示されている。その中の特に(2)距離の操作と(3)人間関係を保つための配慮を行うために、ポライトネス調整機能を有している人称表現・呼びかけ表現がタイ語で大きな役割を果たしているとしている。また、これらの先行研究ではCEFRに準じた形で、タイ語特有の社会的・文化的要素を織り込んだ6段階(A1、A2、B1、B2、C1、C2)の「タイ語コミュニケーションにおける社会文化的適切性のレベルと能力評価項目」を提示している。最も初段階となるA1には14タスクが示されているが、その中の7タスクには人称表現・呼びかけ表現に関連する内容が含まれており、学習初段階からの人称表現・呼びかけ表現の運用に関する重要性を示唆している。タイ語で対話者と適切なポライトネスを保った形でコミュニケーションを行うためには、多様な選択肢の中から対話者や場面に応じて、適切な人称表現を選択する必要があると、この人称表現選択のプロトコルを学習者に習慣化させなくてはならない。習慣化のためには、タイ語の人称表現の多様性を学習初段階から学習者に認識させることが必要と思われ、初級レベルの教材の調査・分析は、習慣化のための素地を養うことが可能かを検証する上で、重要な意味を持つと考える。

今回の分析は大きく分けて2つの方法で行った。1つ目の方法は教材の中で代名詞代用表現・呼びかけ表現がどのように説明されているかの確認である。まず、代名詞代用表現の中でも親族名称(KT)がどのように説明されているかを見てみると、各教材中で次に挙げる説明内容を確認できた。各説明の掲載教材については(a)～(d)で示しているとともに、KT02としての使い方を説明しているものについては、文末に(KT02)を加えている。

5) ウィッタヤーパンヤーノン(2017b)の中で本教材はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)A1～A2相当レベルの内容と評価。

6) ウィッタヤーパンヤーノン(2017b)の中で本教材はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)B1相当レベルの内容と評価。

- タイ語では、人を呼ぶことばとして、親族名称が広く使われる・・・(d) (KT02)
- タイでは親族関係にない人との間でも親族名称を呼称詞と代名詞として用いることが一般的・・・(c) (KT02)
- (親族名称は) 親族関係のある人に対してはもちろんだが、親族関係のない人に対しても使われる・・・(d) (KT02)
- 親族名称を親族関係のない人に対して使うと、親しみの気持ちが表される・・・(d) (KT02)
- 初対面の時から自分と相手との年齢差によって、phii「兄・姉」、nóŋ「弟・妹」、pâa「叔母」、luŋ「叔父」、taa「母方の祖父」、yaay「母方の祖母」、lûuk「子」、läan「孫・甥・姪」などが学校の先輩と後輩、職場の上司と部下、店員と客といった人間関係においても、場面や状況に関係なく使い分けられる・・・(c) (KT02)
- 面識のない人と初めて電話で話す時に、相手の年齢が分からない場合は、互いの年齢を確認し合ってから、その年齢差に相応しい親族名称を使うこともある・・・(c) (KT02)
- 年上の相手のことを示すには、親族名称が圧倒的に多く用いられることが多い・・・(c) (KT02)
- 親族名称に名前を付けて呼ぶこともある・・・(d)
- タイ語では自分より目下の親族名称(弟・妹、子、孫・・・)で相手と呼ぶことは可能・・・(d)

親族名称(KT)については、KT01としての基本義の説明は各教材でされているのに加えて、KT02での使用法を中心に代名詞代用表現としての使い方の説明がされていることが分かる。KT03、KT04、KT05の用法に関する説明は確認できなかったが、一部の親族名称(KT)については、コラム中での解説も含め次のように幅広く、具体的な使用法や意味・機能に関する説明が見られた。

phii「兄・姉」

- (話し手) 話し相手より自分の方が年上の場合・・・(a)
- (聞き手) 自分より年上に対して・・・(a)
- 年上のきょうだい(兄、姉)を表すことば。親族以外でも学校や会社などの後輩に対して、さらには自分の兄姉年代の見知らぬ人に対しても使う。恋人同士や夫婦の間で女性が男性に対して用いる・・・(d)
- 夫婦や恋人同士の間でも、男性が女性より年上であれば、女性が男性を phii、男性が女性を nóŋ と呼び合うことは珍しくない・・・(c)

phii + 個人名 (ニックネーム)

- (話し手) 話し相手より自分の方が年上の場合・・・(a)
- (聞き手) 自分より年上に対して・・・(a)

nóŋ「弟・妹」

- (聞き手) 自分より年下に対して・・・(a)
- 夫婦や恋人同士の間でも、男性が女性より年上であれば、女性が男性を phii、男性が女性を nóŋ と呼び合うことは珍しくない・・・(c)
- 自分の弟・妹の年代のウェイター、ウェイレスへの呼びかけ・・・(d)

luŋ「叔父」 / pâa「叔母」

- (聞き手) 年配の人に対して(親しみをこめたカジュアルなニュアンス)・・・(a)

lûuk「子」

- 自分の子どもへの呼びかけ・・・(d)

khun + 親族名称 (KT)

- 親族名称 (自分より上の世代の親族名称、父、母、祖父、祖母、おじ、おばなど) の前に **khun** を付けると敬意のこもった表現へ
例) **khun phǎo** 「お父さん」 **khun mǎe** 「お母さん」・・・(d)

親族名称 (KT) 以外の代名詞代用表現については、次に挙げるようなニックネームを中心とした個人名、敬称や職業名称のタイトルの使用法についての説明が見られた。

個人名 (ニックネーム)

- (話し手) 話し相手より自分の方が年下の場合・・・(a)
- (話し手) 友達同士 (対等な立場) / 女性が使用・・・(a)
- (聞き手) 親しい友達に対して (対等な立場)・・・(a)
- (聞き手) 自分より年下に対して・・・(a)
- 親しい間柄ではニックネームで呼び合う・・・(d)
- 女性の場合、とくに目上の親しい人と話すときには、一人称としてニックネームを使うことがよくある・・・(d)

個人名 (本名)

- 改まった場面では名を呼び合う・・・(c)
- 一般的には人を名で呼び、日本人のように **naamsakun** (姓・名字 / Family name) で呼ぶ習慣はない・・・(c)
- 人を名前で呼ぶときはふつう、姓ではなく、名のほうを使う・・・(d)

khun + 個人名

- 丁寧に言う場合「～さん」・・・(a)
- 人の名前の前につける敬称「～さん」・・・(c)
- **khun** や **thāan** は敬称として人を表すことばの前に付いて、呼びかけや言及に使われる・・・(d)

khun + 職業名称

- **khun** は職業を表す名称のいくつかと結びつく
例) **khun khruu** 「先生」 **khun mǎo** 「お医者さん」 **khun phayaabaan** 「看護婦さん」・・・(d)

?aacaan 「(教職の) 先生」 / khun mǎo 「医者」 + 個人名

- (職業名称と) 名前との組み合わせ・・・(a)

thāan + 高い地位など

- 高い地位を表すことばや敬意を表すべき人を表すことばの前に付く
例) **thāan naayókrátthamontrii** 「首相」 **thāan phǎu chom** 「視聴者の皆さま」・・・(d)

各教材の中では職業名称や敬意を示すタイトルの使い方、対話者との親疎や上下の関係に応じた個人名、特にニックネームの使い方に関して、詳しく説明されているものの、ニックネームと本名との使い方の違いについては、あまり明確にされていない。例えば、「～さん」に当たる **khun** + 個人名に関する説明は「丁寧に言う場合」や「敬称」と説明されているため、本名にしか使えないと捉える学習者がいる可能性もある。実際には **khun** + ニックネームで使用することもあり、言語

データの中でもその組み合わせは多く確認できた。また、本稿で分析対象とした教材は、日本人向けであるため、名字と名前の使い方の違いが説明されているが、タイ語では名前の中でも本名とニックネームの使い方の違いが重要であるため、個人名の説明の中には、その使い分け方法について、より詳しく説明する必要があるものとする。

これらの説明の掲載箇所については、(a) では人称表現の中の個別の語の解説の中に一部含まれ、(c) 及び (d) では個人名や親族名称 (KT) をテーマとしたコラムの中で解説されている。なお、呼びかけ表現については、随所に「呼びかけで使われる」といった表現が織り込まれていたが、呼びかけ表現に特化した説明は特になかった。

3. 2. 代名詞代用表現・呼びかけ表現の教材での使用状況

2つ目の分析方法は教材の中にある各課の本文である対話文や例文、練習問題の中での代名詞代用表現・呼びかけ表現の使用状況の確認である。実際に教材にどの程度の代名詞代用表現・呼びかけ表現が使用されているかの確認と言語データのアノテーション結果との比較を目的に、4冊の教材の中で対話形式となっている各課の本文、そして表現・文法項目の説明の中で例文として示されている文、解答も含めた練習問題の中にある文⁷⁾を対象に、話しことばデータと同一の基準でアノテーションを実施した。教材のアノテーションについてはタイ語母語話者である筆者が行った。

教材の中でアノテーションの対象である話し手、聞き手、呼びかけ表現を示す語は、4冊の教材を合わせて計 1,481 語であった。言語データでの出現回数は計 23,701 回であり、教材中の対象語は言語データの 6% 強に過ぎないので、原則、各種比率の視点で比較を行っている。

教材を対象としたメインタグ数の概要をまとめたものが表 8 であり、言語データでの比較対象が表 3 である。ここで見られる大きな特徴の 1 つは、全メインタグ中の呼びかけ表現の比率が言語データに対して -14 ポイントと、呼びかけ表現が教材の中ではあまり使用されていない点である。2つ目の特徴としては、代名詞代用表現の話し手、聞き手の各用法内での出現率が話し手で -24 ポイント、聞き手で -28 ポイントとなっており、教材の対話文や例文等の中では言語データと比べると代名詞代用表現の使用率が低く、人称代名詞の方が高い頻度で用いられている点である。

表 8: 教材でのメインタグ数、及び言語データとの比率差

	話し手	比率差	聞き手	比率差	呼びかけ表現	比率差
代名詞代用表現	16(2%)	-24pt	55(11%)	-28pt	23(96%)	+2pt
人称代名詞	926(98%)	+24pt	460(89%)	+28pt	1(4%)	-2pt
計 1,481	942(100%)	---	515(100%)	---	24(100%)	---
全出現回数 内での比率	64%	+14pt	35%	+1pt	2%	-14pt

【備考 1】表中 () 内は各用法内での比率 【備考 2】表中「比率差」は表 3 を比較対象とした比率差

【備考 3】比率は各グループの出現数を四捨五入したままの数字を表示

次に表 4 と同様に、教材中の代名詞代用表現と呼びかけ表現を 8 グループへ分類した結果が表 9 である。教材の本文・例文の中では、(1)KT01、(3)KT03、(4)KT04 としての使用法はほぼ見られないが、これらは基本的には実際の家族関係がある場合やタイ人の知人家族と交流がある場合でのみ使用されるケースであり、初段階の外国人学習者が代名詞代用表現として使用する可能性は低く、大きな問題ではないと捉えている。同じく (5)KT05 についても、教材の中で使われたケース

7) 例文、練習問題の文には 1 文のみの単文や凡そ 1 ターンの対話文がある。

はないが、これはとりわけ特殊な使用方法であるため、初段階では同じく不要と考える。そのため、親族名称 (KT) の中でも (2)KT02 以外は本稿では比較対象から除外しても良いと考え、表中では網掛けとしている。(2)KT02 については、学習初段階の外国人学習者でも使用する機会が多いものと考えられ、かつ前節で見てきた通り、教材の中で詳しく説明はされているが、言語データに対して -24 ポイントと対話文や例文の中での聞き手としての出現率が少ない。

表 9: 教材での代名詞代用表現・呼びかけ表現のグループ別出現回数、及び言語データとの比率差

グループ	話し手	比率差	聞き手	比率差	呼びかけ表現	比率差
(1) KT01	---	---	2(4%)	-20pt	1(4%)	-11pt
(2) KT02	5(31%)	+18pt	4(7%)	-24pt	5(22%)	+3pt
(3) KT03	0(0%)	-3pt	0(0%)	-0.1pt	0(0%)	-0.03pt
(4) KT04	0(0%)	-2pt	0(0%)	-1pt	0(0%)	+1pt
(5) KT05	0(0%)	-0.4pt	0(0%)	-0.3pt	0(0%)	-3pt
(6) 個人名	10(63%)	+20pt	7(13%)	-5pt	4(17%)	-17pt
(7) タイトル+個人名	0(0%)	-0.4pt	29(53%)	+41pt	5(22%)	+5pt
(8) その他	1(6%)	-1pt	13(24%)	+9pt	8(35%)	+23pt
計	16(100%)	---	55 (100%)	---	24(100%)	---

【備考 1】表中 () 内は各用法内での比率 【備考 2】表中「比率差」は表 4 を比較対象とした比率差

表 10 は教材中の代名詞代用表現・呼びかけ表現の 8 グループ、及び人称代名詞の使用語彙数を示したものである。言語データと同様に個人名については、個人名の種類の数を集計しても本研究では意味をほとんど持たないと思われるため、(6) 個人名については本集計の対象外としている。(7) タイトル+個人名の場合も同様で、タイトルとして使用されている語の種類だけを集計対象としている。また、初段階の外国人学習者が使用する可能性が低い (1)KT01、(3)KT03、(4)KT04、(5)KT05 も表 9 と同様に比較検討の対象外としている。表 10 の比較対象である言語データは表 5 であるが、比率での比較はできないため、本結果については教材中に出現した語彙数に注目することとする。(2)KT02 については、呼びかけ表現で比較的多様な語彙が使用されているのに対して、話し手、聞き手については一部の語彙の使用に偏っているように見られる。(8) その他及び人称代名詞についても、データ量の違いがあるため、単純な比較はできないが、言語データで確認された語彙の多様性に鑑みるに、教材で使用されている語彙には偏りがあるのではと思われる。

表 10: 教材での代名詞代用表現・呼びかけ表現、人称代名詞の出現語彙数及び言語データとの語彙数差

	話し手	語彙数差	聞き手	語彙数差	呼びかけ表現	語彙数差
代名詞代用表現・呼びかけ表現						
(1) KT01	---	---	2(2)	-14	1(1)	-13
(2) KT02	1(5)	-10	2(4)	-11	4(5)	-10
(3) KT03	0(0)	-16	0(0)	-2	0(0)	-1
(4) KT04	0(0)	-6	0(0)	-4	0(0)	-4
(5) KT05	0(0)	-3	0(0)	-3	0(0)	-8
(6) 個人名	---	---	---	---	---	---
(7) タイトル+個人名	0(0)	-6	2(29)	-9	2(5)	-23
(8) その他	1(1)	-50	1(13)	-99	5(8)	-142
人称代名詞	8(926)	-20	3(460)	-25	1(1)	-17

【備考 1】表中 () 内は出現回数 【備考 2】表中「語彙数差」は表 5 を比較対象とした比率差

教材のアノテーション結果のまとめの最後として、各グループで使用された具体的な単語を示したものが表 11 である。(2)KT02 の話し手と聞き手を見ると、出現回数は少ないものの、言語データの中でも最も多く出現した *phii* 「兄・姉」が教材でも最も多く使用されている。(8) その他の聞き手と呼びかけ表現では *?aacaan* 「(教職の) 先生」が多く用いられており、これは言語データでも確かに多く出現した語である。しかし、教材で使用されている語は一部に偏っている。

表 11: 教材での代名詞代用表現・呼びかけ表現、人称代名詞の出現語上位

	話し手	聞き手	呼びかけ表現
代名詞代用表現・呼びかけ表現			
(1) Kinship Term01	---	<i>mêɛ</i> (1), <i>lúuk</i> (1)	<i>mêɛ cǎa</i> (1)
(2) Kinship Term02	<i>phii</i> (5)	<i>phii</i> (3), <i>khun pǎa</i> (1)	<i>luŋ</i> (2), <i>phii khráp</i> (1), <i>khun pǎa</i> (1)
(3) Kinship Term03	---	---	---
(4) Kinship Term04	---	---	---
(5) Kinship Term05	---	---	---
(6) Personal Name	---	---	---
(7) Title + Personal Name	---	<i>khun</i> (29)	<i>khun</i> (4), <i>?aacaan</i> (1)
(8) その他	<i>tua?eɛŋ</i> (1)	<i>?aacaan</i> (13)	<i>?aacaan</i> (4), <i>khun tamrùat khráp</i> (1), <i>phûucátkaan khá?</i> (1), <i>?aacaan khráp</i> (1)
人称代名詞	<i>phôm</i> (434), <i>chán</i> (287), <i>dichán</i> (131), <i>raw</i> (63)	<i>khun</i> (438), <i>thəə</i> (16), <i>nũu</i> (6)	<i>khun</i> (1)

【備考】表中()内は出現回数

一方で、日本語では使用することがほとんどない (1)KT01 で *lúuk* 「子供」を聞き手として使用する以下の事例が教材中に見られた。タイ語特有の代名詞代用表現の使用方法を理解する上で、こういった文は有用と思われ、積極的に教材中に取り入れるのが良いものとする。

lúuk 「子供」 = 聞き手・(1)KT01 としての教材での使用例

和文タイ訳の練習問題：「(親が子に対して) お前は大きくなったら、何になりたいのか。」

解答例に記載のタイ語文：

too khúm lúuk yàak pen ?aray
grow up child=you want be what

4. タイ語教育における課題

4.1. 課題

本稿では日本のタイ語教育での代名詞代用表現・呼びかけ表現の現状を確認するための第一歩として、4冊の初級レベルの教材を対象に調査・分析を行ったが、使用頻度が高い親族名称 (KT) やニックネーム、一部の職業名称の代名詞代用表現としての使い方に関する説明が織り込まれていることが確認できた。但し、コラムの中での解説や一部の語の使用法に関する説明にとどまっ

ており、説明内容は散発的かつ限定的である。また、本文や例文の中で、代名詞代用表現の使用率は低く、かつ使用されている語も一部に偏っている。使用する語の偏りという点では、人称代名詞についても同様である。

タイ語で円滑なコミュニケーションを行っていくためには、代名詞代用表現や人称代名詞も含めた多様な人称表現の中から、話し手の性別だけでなく、聞き手との上下と親疎の関係に応じて、適切な語を選択することが求められる (ウィッターヤーンパンヤーン 2021)。しかしながら、ある程度のタイ語の運用能力を有する外国人学習者でも適切な人称表現を使用できていないケースがある。実際に筆者が知る事例として、日本人留学生がタイの大学の先生との対話の中で、話し手として *dichán* (女性が使用する一人称代名詞)、聞き手である先生へ *khun* (二人称代名詞) を使用していた事例がある。*dichán* も *khun* も日本のタイ語教育で丁寧な表現と説明されており、教材の中でも多く用いられている語であるが、タイ人の先生と学生との対話においては失礼な表現となってしまう。本ケースでは、前者は *nũu* (対話者より年下の場合に女性が使用する一人称代名詞)、後者は *?aacaan* 「(教職の) 先生」を使用することが望ましい。こういった事象の一因として、外国人学習者が多様な選択肢の中から、対話者や状況に応じて、適切な語を選択する習慣を身に付けていないことが考えられる。確かに教材中には代名詞代用表現の説明自体はあるが、本文や例文中での使用例が少なく、一部の人称代名詞が教材の中で多用されているため、特定の人称代名詞を使用することに学習者が慣れ親しんでしまい、実際のタイ語の対話において、聞き手や状況に応じて適切な人称表現を選択する意識や能力が養われにくくなってしまった可能性がある。

教材の中で代名詞代用表現の出現回数が少なく、使用されている語の種類も少ない状況となっている理由にはいくつかの仮説が考えられる。例えば、対話形式となっている会話教材の本文は連続したストーリー展開、あるいは共通の登場人物となっているため、登場人物の関係性も限られてしまい、多様な表現を織り込みにくい。また、代名詞代用表現は以下の例文で挙げた通り、話し手としても聞き手としても、さらには三人称でも同一語を使用することが多く、特に単発の例文では、日本語訳に加え、状況説明の表記も必要とされる。例文ごとに話し手と聞き手の関係性や状況の説明を1つ1つ加えるのは煩雑かつ文字数も増え、教材の限られた紙面スペースでは代名詞代用表現は使いにくいものと思料される。

例)

<i>phĩi</i>	<i>kin</i>	<i>nóoy</i>	<i>máak</i>
elder brother/sister	eat	a little	very

「*phĩi* は小食だ。」 → *phĩi* = I or you or (my)elder brother/siter のいずれも考え得る。

4. 2. 今後に向けて

タイ語のコミュニケーションにおいて、人称表現はポライトネス調整機能という重要な役割を担っており、外国人学習者もその選択・使用方法を正しく習得する必要がある。そのためには、まずは学習者がタイ語の人称表現の多様性を認識した上で、その選択のメカニズムを理解し、多様な選択肢の中から適切な語を選択することを習慣化することが重要である。そして、その選択肢の中には、人称代名詞だけでなく、代名詞代用表現も多数含まれ、タイトルとの組み合わせ、呼び

かけ表現においては終結小辞も含め、どういった語が代名詞代用表現・呼びかけ表現となり、どういったケースで使うべきかを習得していくことが求められる。そういったタイ語におけるコミュニケーションの素地を醸成するためには、学習初段階の教材においても、使用する代名詞代用表現や人称代名詞の語彙の幅を広げ、対話文や例文で多様な人称表現に最初から慣れ親しむことは有用であると考えられる。

多様な語彙の中から、教材の中に織り込む語彙を検討していくには、一例として次のような検討プロセスが考えられる。まず外国人学習者が遭遇する可能性が高い場面を調査した上でリストアップし、それらの場面に登場可能な、関係性が異なる対話者の組み合わせを予め複数設定してみる。次に学習カリキュラムに沿って、検討した場面と登場人物の組み合わせを織り込む形で対話形式の本文を検討するとともに、本文に織り込めない場面や登場人物の組み合わせを、特に対話型の例文や練習問題の設定に用い、前章で例示したような「親が子に対して」といったような対話者間の関係性も簡潔に示した上で、代名詞代用表現を積極的に使用してみるという手順である。一方で、対話形式ではない単文の例文や練習問題で代名詞代用表現の使用が煩雑であれば、そこで使用する人称代名詞に多様性を持たせることも提案したい。

これはあくまで検討プロセスの一案であるが、他のアプローチで検討する場合も含め、今後新たな教材開発の検討を行っていくための課題の1つとして、外国語としてのタイ語教育に織り込むべき代名詞代用表現の検討がある。その整理・検討に当たって、協同研究で今回新たに構築した言語データが貢献する可能性が高いと考えている。他にも親族名称 (KT) については、KT01～05の学習タイミングの検討も課題の1つであろう。例えば、KT01については、最初は基本義である意味の範囲だけにとどめ、タイ人の家族内での会話例までは学習初段階では不要かと思われる。一方で、外国人学習者が早い段階から代名詞代用表現や呼びかけ表現として使用する可能性が高いKT02の使用法については、使用法や意味・機能の説明だけでなく、初級レベルの教材中の本文や例文にも積極的に組み込みたい。それだけでも、多様な選択肢があることを学習者へ意識付けしていくことに効果的かと思われる。KT03～05については、学習が進み、映画、ドラマ、小説など生のタイ語教材を活用する段階になって、それらの使用方法で親族名称 (KT) が出現する際、都度その使用法に着目した説明を行うなど、段階的に指導する形が適切と考えられる。

おわりに

Iwasaki and Ingkaphirom(2009)をはじめとした先行研究の中で、タイ語の人称表現については人称代名詞に焦点が当てられる傾向であった。本稿で確認できた通り、タイ語での話し手と聞き手を示す代名詞代用表現・呼びかけ表現は非常に多様性に富んでおり、代名詞代用表現・呼びかけ表現の使用実態、及びタイ語教育というそれぞれの領域での更なる深掘りや今回とは異なる側面からの調査・分析が求められる。

代名詞代用表現・呼びかけ表現の使用実態という点では、今回構築した言語データを多方面の研究領域に資するより有益な言語資源とするためにも、アノテーションを行った語彙を用いて、話し手、聞き手、呼びかけ表現の全用法共通で使われる語や一部の用法のみで使われる語の分類・分析、タイトル+ボディの組み合わせに関する分析、呼びかけ表現についてはタイトル+ボディに加えて終結小辞との共起パターンなどの機能的特徴を明らかにしていきたい。一方で、今回、調査・

分析対象とした言語データは基本的に現代タイ語の話しことばの実態を反映しているものの、小説やドラマの台本という創作物ではあるため、本データの他にも日常的な会話コーパスなど、より多様な言語データでの調査・分析を行うことも必要であろう。

タイ語教育領域での更なる検証については、中上級レベルでの教材内容や各レベルの学習者の人称表現の運用能力の確認が必要と考える。日本でのタイ語教育の実態と課題を明らかにした上で、より日本語母語話者に適した学習カリキュラムの検討を行うことが求められるが、そこでは協同研究の成果を活用できる可能性がある。協同研究は、日本語も含めた8言語での通言語研究であるため、日本語の言語データでのアノテーション結果との比較が可能であり、代名詞代用表現・呼びかけ表現に関するタイ語と日本語の共通点や相違点を検証し、日本語母語話者のタイ語学習者により適した学習内容や指導方法の検討を探っていきたい。他にも、話し手と聞き手を示す語の適切な運用という点では、ゼロ代名詞の出現傾向の分析も必要と考えている。

タイ語の人称表現・呼びかけ表現は使用されている語彙数が多く、学習者にとってその使用方法は複雑で難しいかもしれないが、逆の見方をすると、適切に運用できれば、タイ語のコミュニケーション能力を大きく向上させる要素である。今後、使用実態の更なる調査・分析とともに、学習カリキュラムの中への包括的かつ体系的な織り込みを検討していきたい。

参考文献

- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2015. 「日本人タイ語学習者の発音問題と指導方法に関する一考察」. 『東京外大 東南アジア学 第 20 号』 pp.37-55.
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2016. 『表現を身に付ける初級タイ語』 . 三修社 .
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2017a. 『表現を広げる中級へのタイ語』 . 三修社 .
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2017b. 「CEFR を参照とした日本人タイ語学習者向け教材に関する考察 — 「外国語としてのタイ語教育」スタンダード開発に向けて —」 『東京外国語大学論集 no.94』 pp.169 -188.
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2017c. 「タイ語教育における CEFR 適用に向けたタイ語特有の社会・文化的要素に関する考察」 『東京外国語大学論集 no.95』 pp.231-250.
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2020. 「タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する考察」 『東京外大 東南アジア学 第 26 号』 pp.1-23.
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 2021. 「社会・文化的要素を踏まえたタイ語教授法に関する一考察 — 人称表現・呼びかけ表現を事例として —」 『2018-2020 年度 科学研究費助成事情 基礎研究 (B) 研究プロジェクト アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発 - 研究成果報告書 (2018-2020)』 pp.49-66.
- ウィッターパンヤーノン スニサー . 富盛 伸夫 . 2020. 「タイ語教育における社会文化的適切性と CEFR への適用 — ポライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心に —」 『外国語教育研究 外国語教育学会 紀要 23 号』 pp.96-114.
- 岡野 賢二 . 野元 裕樹 . ウィッターパンヤーノン スニサー . トウザ ライン . 春日 淳 . 2022. 「アジア三言語における代名詞代用・呼びかけ語の共通項目調査」 『言語処理学会 第 28 回年次大会 発表論文集』 pp.69-73.
- 野元 裕樹 . ウィッターパンヤーノン (齋藤) スニサー . 岡野 賢二 . トウザ ライン . 南潤珍 . スリ・ブディ・レストリ . 2021. 「代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状：タイ語、ビルマ語、マレー語、インドネシア語、ジャワ語、朝鮮語」 『語学研究所論集 25 号』 pp.63-78.
- 三上 直光 . 2002. 『タイ語の基礎』 . 白水社

宮本 マラシー . 村上 忠良 . 2014. 『タイ語 (世界の言語シリーズ)』 . 大阪大学出版会

Iwasaki, Shoichi. Ingkaphirom, Preeya. 2009. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sornlertlamvanich, Virach. Nomoto, Hiroki. Wittayapanyanon, Sunisa. Kasuga, Atsushi. Okano, Kenji. Okubo, Wataru. Nam, Yunjin. Miyake, Yoshimi. Thuzar, Hlaing. Taniguchi, Ryuko. Sri Budi, Lestari. 2022. “Collaborative Collection of Multilingual Pronoun Substitutes and Address Terms” . 2022 7th International Conference on Business and Industrial Research (ICBIR) - Special Session: Language Processing in Data Analytics Era.

Sornlertlamvanich, Virach. Wittayapanyanon, Sunisa. 2023. “Corpus Development for Pronoun Substitute and Address Term Study.” 2023 8th International Conference on Business and Industrial Research (ICBIR).

The Royal Institute Dictionary พจนานุกรม ฉบับราชบัณฑิตยสถาน. 2011. Bangkok: Royal Society of Thailand.